巻頭言

変化の節—学会の機能と役割—

総務理事　富永　英義

ベルリンの壁が消えてから，世界のさまざまな仕組みが激動といえる変化がしている．規制下の独占形態にある通信サービスと，無規制の競争状態にある情報処理サービスを荷なう仕組みも大きな変化をしている．

本学会の仕組みも大きな変革期にあるといえる．

本学会の発展の節をふりかえると，学問，技術の発展を軸に，その時代背景に対応した学会運営がなされてきた．いわゆる“産官学”のそれぞれの技術者と研究者の集りが，科学技術の振興を旨として，学会としての権威を確立するために，それぞれの時代の役割を果たしてきた．

我が国の経済が発展途上状態にあったとき，それと密接する科学技術に対する我が国の研究者や技術者の取組方も，その状況に則したものであった．経済や産業技術に対する我が国の力が世界をリードする状況になった現在において，先進的な成熟した社会に対する仕組みや制度が，まだ我が国において確立していない．

大学をとりまく諸々の仕組みや環境はまさに途上国状態に作られたものをそのまま維持している．経済力が世界の一流となったといっても産業界の人々の大学や学会に対する意識は依然として旧態ではないだろうか．

学会をとりまく諸々の環境も大きく変化している．その大きな“うず”は二つあるようにみえる．その一つは「多様化を軸とした自由競争」である．もう一つは「グロバリゼーション」である．

学問・科学・技術の多様化と共に価値感の多様化により，大小さまざまな集りがあり，学会へと発展している．本学会の活動はそれらの隣接する学会との競争を意識する時代になったといえる．本学会の内部においても，多様化が進み，相互の競争が必要となっている．このことは学会の設立時からつい最近までの間は，比較的単一的な価値感と目的意識で，会員諸兄が学会に参加したことに比較すると，大きな変化といえる．

学問・技術はそれ自体は本来グローバルなものであるが，それを取り扱う人間の意識，とり分け，集団や組織になったときの意識は，日本の国に閉じた意識になりがちであった．これを打ち破る意識の言葉として“国際化”が多用される．国際化の概念を考えるとき，その概念のあいまいさに気がつくと，我が国の閉鎖性の度合いが理解できる．

学会は会員による，会員のための，組織である．その目指すところは，学問・科学・技術の自由な発展競争を生むことと共に，諸外国との連携の場となることではないだろうか．